

紙芝居と保育

矢口 裕 康

kamisibai and childcare

キーワード：保育 紙芝居 言葉の素材 語る 民間説話

概要：乳幼児期の子どもと、保育者の交流手段は話し言葉が主である。子どもの話し言葉を育てる素材に、絵本・紙芝居がある。絵本は、親達の読み聞かせ活動の熱心な取り組みもあり、かなり注目されている。しかし、もう一つの言葉の素材である紙芝居は、保育への導入に対してもまだまだの感だ。そこで短大教師時代から、長年、紙芝居の保育での活用も唱えてきた。

本考では、その延長線上の試みとして、子ども教育学科2年生での授業展開を主に纏めてみた。

1 はじめに

保育の世界で、子どもに対してのことばの素材でよく用いられているのは“絵本”であろう。現在家庭内伝承でも、昔話が語られることはない。このような現状の中、“紙芝居”という日本で発祥したことばの素材に、もっと注目していくべきであると、長年唱えてきた。

本稿では、紙芝居を三つの視点から捉えてみたい。

一つ目は、紙芝居出版社・童心社が提案する「紙芝居の演じ方」

二つ目は、「保育内容指導法・言葉」(2013年度2年生後期、70人受講)の授業を通して出現した紙芝居に対する学生の思いと、演じる上での92のポイント

三つ目は、紙芝居の具体的活用法である。

保育者の語りでの紙芝居が、ますます盛んになることを願う本稿を纏めたい。

2 紙芝居出版社・童心社提案の「紙芝居の演じ方」

紙芝居は、“紙”の芝居である。聴き手が目にするのは画のみで、語り手が紙芝居の裏に書かれた物語を、演出ノートを踏まえて語らない限り進行しない。また紙の芝居(ドラマ)であるから、演じるといふ表現が適切である。

童心社の紙芝居ケースには、二種類の紙芝居を演じるためのポイントが印刷されていた。

〈紙芝居のやり方

(演ずる前に必ずお読みください)

- ①かならず舞台をお使いください。紙芝居は、動かない画と、文と、朗読とぬき方をともなう実演とが、渾然一体となって、幼児をたのしいドラマの世界に誘う視聴覚教材です。舞台へいれて演じないと、ぬき方の効果が全然期待できませんので、紙芝居のたのしきは半減してしまいます。
- ②かならず下読みをしてください。作品のテーマ、語り口、登場人物の性格などをつかんで始めないと失敗します。
- ③はじめる前に、画が順番通り揃っているか、かならず確かめましょう。順番が狂っていて、途中でやり直しをすると、もりあげてきたドラマが中断されて、せっかく集中してきた子どもたちは、とまどってしまいます。
- ④紙芝居では、ぬき方がたいへん重要です。単純な一ぬく一でも、無神経にぬいたのでは効果が半減します。一ぬく一という動きが、ドラマの進行、展開の上で重要な役割をしますので、水平に、静かに、心をこめてぬいてください。一ぬきながら一、一はやくぬく一、一線までぬいて一など、その部分の文章と画面の総合する効

果をよくのみこんで、指定どおり演じてください。

- ⑤紙芝居は、演じての持ち前の声、調子で、せりふも、老人らしく、こどもらしく演じわせる程度がよく、オーバーな声色は、かえって、動かない画面との調和を破って、ドラマを破綻させます。
- ⑥その作品にふさわしい語り口、緩急のリズムがありますので、それにのるように演じてください。こどもたちの理解やよるこびをいっそう大きくすることでしょう。)

〈紙しばいを楽しむために
(演じる前にお読み下さい)

- ①紙しばいは、作者の思いがこめられた文とわかりやすく印象の強い絵でできています。紙しばいの作品世界を十分理解して演じることで、見ている子どもたちとの間に、すばらしい共感の世界が広がるのです。
- ②舞台を使って演じて下さい。文と絵と舞台を使った効果的な演じ方で、紙しばいの魅力は倍増します。
- ③は始める前に下読みして、作品のテーマやストーリー展開、語り口などを理解しておくといでしょう。また、場面が順番どおりになっているか確かめましょう。
- ④演じる時は、舞台の横に立って、子どもたちの様子を見ながらすすめましょう。また、紙しばいの裏に、演じ方のポイントや、効果的なぬき方のアドバイスが書いてあります。参考にして作品が生きるように演じましょう。
- ⑤紙しばいを演じる時、オーバーな声色を使う必要はありません。作品に出てくる登場人物たちの気持ちになって、自然に、心をこめて演じることが大切です。子どもたちと共に、楽しく紙しばいの世界を味わって下さい。)

この二点の演じ方では、「声色」の表現に注目したい。『新明解国語辞典』（三省堂）には「物言う際の、その人独特の声質や抑揚、間の取り方や言い回しなど」とある。つまり、あまり語り手が飾り立てず、自然体で演じるのが望ましいという

ことである。

2013年童心社は、紙芝居カタログ中「紙芝居の魅力って？」で

○ゆっくりしたテンポが子どもの心や体のリズムにぴったり。

子どもたちにとって、紙芝居は心地よくうれしい体験です。大好きな先生が、向いあって子どもたちに紙芝居を演じる時、あたたかなこころの交流がうまれます。子どもたちは、作品にこめた思いをこころした心の交流を通じて受け取り、感受性を豊かに育てていきます。

○先生や友だちどうしの心がつながり、信頼が深まります。

クラスみんなでハラハラドキドキ楽しめる紙芝居には、家族や一人では味わえない喜びがあります。みんなの存在を感じながら、ともに物語を楽しむという体験は、子どもたちの心に、おたがいを信じ合い、ともに支え合って生きる心の土台を作ります。

と紙芝居の保育での活用を促している。

3 「保育内容指導法・言葉」授業での学生の思い、そして紙芝居92のポイント

「保育内容指導法・言葉」の授業では、毎回授業記録を書いて提出することになっている。ある学生が「今日は紙芝居のお話を聞きながら自分の今までの演じ方を振り返っていました。私はどうしてもオーバーな声色で話していたことが多かったので、そこは注意しようと思いました。これが正しい、これが悪いではなく、自分の中で良いと思ったことを取りいれて、自分なりの紙芝居の展開が作れたらなと思いました」と書き、自分なりにポイントを11個あげてくれた。その11のポイントは、

1. 「紙のドラマ」が大切
2. 舞台だと、水平に静かに抜ける
3. 舞台は手が空くので、コミュニケーションが取れる
4. “そで”があるので、抜いた絵が見えない
5. オーバーな声色はいらない

6. 緩急のリズムが大切
7. 共感の世界が広がる
8. 子どもたちが聞きとりやすい声の大きさ、リズム
9. 次の展開に進む時の間の取り方
10. 下読みと、チェックは必ずする
11. 心をこめて読む（語る）であった。

次の授業でその11のポイントを板書した。すると7人の学生が18のポイントを授業記録に記してくれた。「〈紙芝居〉というものは、私が思うより、奥が深いものです。舞台の存在を知っていましたが、それは〈ちょっと豪勢に見える程度のもの〉としか捉えていませんでした。このようにして私は保育というものを探求・追究していくのだろうかと思います。保育というか、〈子どもの育ち〉という、私の憧れを追究していくことは、どこか知りたくないという気持ちとの戦いなのかなと思います」と、まだ保育者として学び始めた学生から含蓄に富んだ感想をもらった。保育とは発展するものだが、授業も学生の受け取りを通しての成長である。

12. 園児たちの反応・表情を観ながら、水平に静かに心をこめて語る
13. 笑顔で、子どもの気持ちをうけとめて語る
14. 抑揚をつけ、スピードも大切に、オーバーな声色にならず、はっきりと発音する
15. 一方的にならず、丁寧語る
16. ドラマの世界に誘うように語る
17. 共感の世界が広がるように語る
18. とにかく楽しく語る
19. 「おわり、おしまい」を言わない。
20. 紙芝居の裏のポイント・演出ノートを参考にして、作品を自分なりに生かす
21. 子どものその日の様子を観察し、紙芝居の内容を決める
22. 季節にあった紙芝居もいい
23. 紙しばいが何でできているかを考える→作者の思いがこめられた文と、わかりやすい印象の強い画
24. 舞台の横に立って、子ども達の様子を観なが

- ら語る
25. 抜き方に気をつける
26. 抜き方が重要、ただ抜くのではなく心をこめて抜く
27. 子ども達と共に楽しい紙芝居を味わう
28. 紙芝居は渾然一体
29. 舞台と手、どちらも有効に使い語る

さて、29のポイントを挙げた際、30以降何かあげてみようかと提案してみた。すると63のポイントが上がり、紙芝居のポイントが92に膨らんだ。授業は、学生と教師で成立する空間であることを実感するひと時である。

30. 「抜き方の工夫」→絵本にはない魅力
31. 抜ききってから語ることで、間が生まれる
32. 下読みをしておいて、特に大切な所は少しためをつくらたりする（抜き方の工夫）
33. 抜き方を工夫することで、世界が広がる
34. ぬき方に気をつける
35. 手で（紙芝居を）語るときは持ち方・持つ位置に気をつける
36. 幕紙を使う
37. 画がより大きく見える
38. 本を読む前でも、後でもOK
39. 「おしまい」を言わない
40. 最後に題名も言う
41. 作品の内容を考えて、子ども達へのメッセージになりそうなものをえらぶ
42. 紙芝居の選択にも気をつける（時季・時機・時期とか）
43. 時間をかけて紙芝居をえらぶ
44. 何度も読みこんで、自分なりを見つける
45. ためし読みをしよう
46. 下読みをして、子どもたちに伝わるように語る
47. 紙芝居を語る前に、手遊びで子どもたちの興味をひく
48. 紙芝居に入る前の導入、子どもをひきつける技を身につける
49. どこに視線が集まっているのか
50. 聴き手を常に意識すること
51. 紙芝居を味わう子ども達の視点に立って読む

- (語る)
52. 子どもたちの反応を感じながら語る
 53. 子どもたちが紙芝居に見入っているかを、時々確認する
 54. 紙芝居を読みながら、子どもたちを観る
 55. 子どもたちとの対話（このあとどうなると思う？みたいに・・・）しても楽しいかも
 56. 自分自身も楽しむ
 57. 読み（語り）手自身が楽しむ
 58. 自分も一緒に、物語を楽しむ
 59. 語る方も楽しむ
 60. 演じることの楽しさを実感する
 61. 語り手も一緒に、楽しい紙芝居の世界を共有し合う
 62. 子どもと一緒に物語の世界にひたる
 63. 子どもたちと一緒に楽しむ
 64. 子どもたちに響くように演じる
 65. みんなが楽しめるように
 66. 楽しくきいてもらう
 67. 雰囲気味わえる
 68. 心を込めて語る
 69. 子どもたちを自分の語りに引きこむ
 70. ガチガチに緊張しなくていい リラックスして語ることが大切
 71. 語り手も話の中に入って語る
 72. 語る側も一緒にドラマを楽しむ
 73. 語りながら、自分もドラマに入りこむ
 74. 読む（語る）にあたり、なりきる必要
 75. 読み（語り）手は役者
 76. 役によって話し（語り）方を変える
 77. 男性と女性がでてくる物語では、男性職員と二人で語る
 78. 「おしばい」の中に入り込まない ある程度客観性を持つ
 79. 話の魅力を伝えられるように語る
 80. 話の流れを理解し、それに合わせて口調や話す（語る）雰囲気をかえる
 81. 紙しばいの意味を考えて語る
 82. 紙しばいの良さを全面に表現できる読み（語り）方
 83. 子どもたちの想像がふくらむような話を、語ってあげる
 84. 紙芝居のその後が想像できるようにさせる
 85. 子ども達に想像をたくさん持てるように語る
 86. 紙芝居を読む（語る）だけでなく、子どもたち自身にも想像させるようにする
 87. はっきりと発音する
 88. 抑揚をつけながら、楽しく
 89. 丁寧に読む（語る）
 90. 語り終わった後の子どもたちとのお話（コミュニケーション）も大切にする
 91. 子どもたちに感想を聞かない
 92. 自分も、以上のことはもちろんのこと、子どもたちに楽しんでもらえるように語りたい。そして紙芝居に触れることが少なくなっているけど紙芝居のおもしろさを伝えたいな
- 子ども教育学科で学んだことで、保育者としての魅力を養成できればと思っている。その一つが、紙芝居を魅力的に子どもたちに届けることの出来る保育者である。
- 「他の学生の紙芝居のポイントを聴いて、自分なりのポイントをはっきり決めていきたいと思いました。11のポイント参考にしながら見つけていこうと思います。そして〈紙芝居ならこの人〉といわれるくらいになりたいです」との感想、心強く思った。また「今日は“人によって成長する”という言葉が心に残りました。たくさんの保育士や友達、先生、子どもたちに出会って成長していきたいです。そして私も誰かを成長させることの出来るような力のある人になりたいです」まさに、人は人によって成長するである。
- 〈注〉「授業記録」とは、毎時間私が用意した広告紙の白紙部分を使って、90分の授業を記録するものである。授業の記録は各人自由である。学生には、姓名（読み仮名も毎回振ってもらう。「授業記録」は、次の授業時に学生に返す。その際、教師として学生の名前を間違えずに読みたいためである。学生たちにも、今後会うであろう子どもたちの名前をきちんと読んで欲しいとの願いも込めての振り仮名でもある）年月日（曜日）天候・六輝（六曜）、紙の大きさ・色・質、そして

その日の授業内容を10字以内でタイトルの形で要約することも、お願いしている。

4 紙芝居活用法

紙芝居を子どもたちに提示する手立てとして、神話・昔話から提案したい。

(1) 神話を紙芝居から語る

2013年は、古事記編纂千三百年であった。そこで、我が蔵書中の絵本・童話・紙芝居を点検してみた。絵本・童話は29点あるが、紙芝居は3点のみであった。

その3点は、

☆神話紙芝居『あまてらすさま』（9場面）

「紙芝居ケース」に〈今から千年も昔に、『古事記』という本ができあがりました。古事記は日本でいちばん古い本で、はるか昔に活躍した神さまたちのお話がかかれています。この、神さまたちのお話のことを「神話」といいます。神話の紙芝居を聞いて、日本の神さま、あまてらすさまのことを知ってください〉と、天照大御神のことをわかりやすく、かつ噛み砕いて紙芝居としている。

☆『やまたのおろち』（前編・後編各12場面）

1990年2月10日、童心社発行、脚本・川崎大治、画・田島征彦

この紙芝居について東京都中野区ゆりかご幼稚園副園長、大岡秀明は、

『やまたのおろち』は、人々に長い間、語り継がれ親しまれて来た日本神話のなかの物語です。八つの頭と尾を持った巨大な大蛇とスサノオノミコトの闘いの部分をはじめ、紙芝居のなかでは、太古の時代を想起させるような個性的な絵で、日本神話の雄大な冒険とロマンの世界が繰りひろげられます。この個性的な絵とともに、この紙芝居の特徴は、登場人物の描き方にあるといえます。スサノオは、大蛇のいけにえに捧げられようとしているクシナダヒメの両親の悲しむ姿を見て、大蛇との闘いを決意します。そして、スサノオは、計略をめぐらし、村人たちの力をかりて、やぐらを組み、酒がめを用意します。はげしい大蛇との闘いは、きびしいものですが、スサノオは最後まで自分の気力をふりしぼって勇敢に立ち向かって行きます。この少年スサノオの姿は、勇気にあふれています。が、しかし、スサノオは、人間ばな

れた「神様」のような力はそなわってはいないのです。スサノオの勇気を支えたのは、人間の命をなにより大切に思うやさしい心であり、またその勇気ある闘いは、自分の知恵や他人の力をかりて、行われるのです。つまり『やまたのおろち』は、日本神話をただ「神様」の冒険物語としてではなく、太古の時代にも存在していたヒューマニズムの原点としても光をあてているのです。と、神話紙芝居の魅力を訴えている。

☆『うみさちやまさち』（12場面）平成9年3月、全国神社保育団体連合会発行、全国神社保育団体連合会・製作、伊沢やすと・画

「紙芝居をはじめのまえに」として、

〈皆さん、お父さんやお母さんから日本の昔話を聞かされてもらったことはありますか。どんなお話をしてもらいましたか。ここで、ちょっと目を閉じてずうっと、ずうっと昔のことを考えてみてください。皆さんの頭の中には、どんなことが思い浮かんで来ましたか……。皆さんのお父さん、お母さんにも、そのお父さん、お母さんがいますね。皆さんのお祖父さんや、お祖母さんのことです。お祖父さんにも、お父さん、お母さんがいました。そして、一番最初のお父さん、お母さんの頃までたどって行くと、神さまの時代になります。どのくらい前のことだとおもいますか。百年前？二百年前？いいえ、それよりももっと、もっと昔のことです。私達が住んでいるこの日本の島も、神さまの時代の初めにイザナギ、イザナミという二人の神さまによって造られました。それから、海や山、木や草、食べ物や着る物などの色々な神さまが次から次へと生まれて行きました。今皆さんが、毎日楽しく暮らしていくことができるのも、こうした神さまがいるからなのです。おや。どうしてそんなに昔のことが分かるのかって？良い質問ですね。では、その訳を教えてください。神さまの時代のお話は、神話といって『古事記』という日本で一番古い本の中に書かれています。この本は、今から千三百年も昔に作られました。大昔の人たちは、神さまの時代の出来事を忘れないために、神さまのお話を子供たちに聞かせていました。その子供たちも、また次の子供たちに話して、次から次へと伝えていったので、

今でも神さまの時代のことが分かるのです。これから皆さんにお話しする、「うみさちやまさち」も、『古事記』の中に書かれています。『古事記』は、日本の国が出来前からのお話や、大昔の不思議なお話が沢山入っているとても面白い本です。どうか皆さんも、この紙芝居をよく聞いておいて、まだ知らないお友達に教えて上げて下さい。)

と、『古事記』の魅力へと繋げている。日本神話に乳幼児期から、紙芝居をとおして自然に親しむ環境を、保育者が保障してあげたい。

(2) 昔話紙芝居から宮崎県昔話の魅力を描き出す

宮崎県昔話の独自性を、全国的な昔話の典型である紙芝居を語ることを通して掴み取ることができる。

〈1〉鼠の嫁入り

*紙芝居

『ねずみのよめいり』(全12場面) 昭和28年12月20日、藤下書房発行、文・中村小坡、画・林義雄
『ねずみのよめいり』(12場面) 1989年5月11日3版、教育画劇発行、文・福島のり子、画・エムナマエ

*宮崎県昔話「石屋が一番」

〈むかしむかし、あったげな。

石屋に三代目の孫がでけたげなが、その孫が、

「石屋は好かんが、石屋はせん」

と言うたげな。そこで、爺さんが、和尚さんとこさね行って、

「うちの孫は石屋さんをせんと言うが、石屋をするごつ、げち(説教)してください」

と言うたげな。そこで和尚さんが石屋の孫を呼んで、聞いたげな。

「おまえは石屋を好かんごつ言うが、何になるつもりか」

「わたしは馬に乗った武士になりてえ」

「なに武士になりてえ、それが一通りの心配があるが。武士の上には殿さまがおって、そこ行けあそこ行けと言うて、ちっとん頭(びんた)はあがらんぞ」

「そんならわたしは、その殿さまになりてえ」

「なに殿さまがいいかろうか。その殿さまの上には天下(てんが)という人がいなるぞ」

「そんならわたしは、その天下(てんが)になりてえ」

「天下(てんが)になってみよ、天下(てんが)の上じゃお陽さまという人がおるが」

「そんならわたしは、そのお陽さまになりますか」

「なにお陽さまがいいかろうか。むしろ干しちゃかわかんと言うて、すぐに雲が出てくるが」

「そんならわたしは、雲になります」

「なにお陽さまがいいかろうか。東から西から風が吹いてきて、思うごつ動かれもせんぞ」

「そんなら和尚さん、わたしは風になります」

「なにお陽さまがいいかろうか、西にも東にも大きな岩があつて、西へ行けば頭(びんた)をこづき、東へ行けば向こう面を打つがよ」

「そんなら、その岩になろうかい」

「どうして、また岩がいいかろうか。岩になってみよ、石屋というえらいやつがおつて、毎(め)え日(にち)毎(め)え日(にち)、コッチンコッチン、切らるるがよ」

「そんなら和尚さん、わたしはその石屋になります」

「それみよ、やっぱり石屋が一番いいじゃろがな」そこで、三代目の孫も、親譲りの石屋になったげな。

とんぼしかつちり。)

宮崎県の「鼠の嫁入り」は、全国的に語られる〈太陽→雲→風→土蔵→隣に住む鼠〉の展開の前に石屋型とも称することが出来る展開が語られている。この「鼠の嫁入り」は、青森県八戸市・埼玉県川越市・千葉県某地・愛媛県北宇和郡そして宮崎県清武町に語り伝えられている貴重な語り方である。

〈2〉笠地蔵

*紙芝居

『かさじぞう』(12場面) 昭和40年12月1日、教育画劇発行、文・足沢良子、画・西原比呂志

『かさじぞう』(16場面) 昭和61年4月20日5版、教育画劇発行、文・長崎源之助、画・箕田源二郎

*宮崎県昔話「ばっちょ笠と地蔵さん」

〈むかしむかし、あるところに、信心深い婆さん

が住んでいましたげな。

ある日婆さんは、お寺の参りの帰り道、雨にぬれている地藏さんを見たげな。

「まあまあ、地藏さん。雨にひんぬれて冷たかろう」

婆さんそう言って町へ出て、ばっちょ笠を買ってきた。

そうして、そのばっちょ笠を地藏さんにかぶせてやったげな。

その晩のこと。婆さんの家の戸を、トントンとたたく者があった。婆さんが戸を開けてみると、ばっちょ笠をかぶった地藏さんが

「これ婆さん、笠賃よ」

「これ婆さん、笠賃よ」

と言いながら、山吹色のまぶしい小判を、ぼんぼん投げこんだげな。

次の晩も、その次の晩も

「これ婆さん、笠賃よ」

「これ婆さん、笠賃よ」

と地藏さんが、小判をぼんぼん投げて帰った。

婆さんは、たちまち分限者になったげな。

これを聞いた、となりの欲ばり婆さんが、雨の降るのを待っていた。

雨がぱらぱら降ってきたので、喜んだ婆さんは、町へ行って、笠を買ってきたげな。そうして、地藏さんにかぶせてやった。欲ばり婆さんは、毎(め)え晩(ばん)、毎(め)え晩(ばん)、

「これ婆さん、笠賃よ」

と言ってくるのを待っていたげな。

しかし、地藏さんは訪ねて来ん。

ある晩のこと。

ようやく地藏さんがやってきたげな。

「これ婆さん、笠賃よ」

と言って、地藏さんが投げこんでくれたのは、ちぎれた馬の草鞋やった。

かんかんに怒った欲ばり婆さんは、

「こんげ、へえとも知れんもん、湯殿さねくべろ」と言った。

欲ばり婆さんは、湯殿の灰を裏の畑へ捨てた。すると、そこの灰の中から、ニョキニョキと竹の子が一本生えてきたげな。

竹の子はぐんぐん大きくなった。

ぐんぐん伸びて、天まで高くなつたげな。

とうとう、天のお倉の便所に穴をあけてしまったげな。

たいへん、たいへん。欲ばり婆さんは臭い臭いうんこをかぶってしまった。

“人のまねすつと、糞かぶり”

村の人たちは、そう言って笑ったげな。

ともすかっちり。)

昔話の常道の一つ、〈隣の爺型〉である。しかし爺さん同士の葛藤ではなく、婆さん同士とし、語りの最後は「人真似すつと糞かぶり」と教訓も込めた笑い話としている。全国的な「笠地藏」とはひと味違う、おおらかさを込めた語り方である。

このように全国的な昔話を紙芝居で語り、宮崎県の「鼠の嫁入り」「笠地藏」を語ると、魅力が際立つだろう。

〈注〉宮崎県昔話「石屋が一番」「ばっちょ笠と地藏さん」は、語り手の原話(採話)を基に筆者が『みやざきの言の葉一神話・伝承、民話編一』で再話した昔話である。

5 おわりに

昔話がかつてのように語られなくなった現在、紙芝居を通して語りの復権の実現を、学生達と共に目指してきた。その中、六冊の紙芝居啓蒙書に出会い、学ばせてもらった。その六冊とは、

* 右手和子 著『紙芝居のはじまりはじまり〈紙芝居の上手な演じ方〉』子どもの文化双書・1986年7月25日、童心社発行

* 阿部明子・上地ちづ子・堀尾青史 共編『心をつなぐ紙芝居』

1991年8月1日、童心社発行

* 『園と家庭をむすぶ げ・ん・き』NO.54「特集 紙芝居ってな〜んだ」1999年6月25日、エィデル研究所

* まついのりこ 著『紙芝居共感のよろこび』1998年9月21日、童心社発行

* まついのりこ 著『紙芝居の演じ方Q & A』2006年10月31日、童心社発行

* 酒井京子・日下部茂子 共著『紙芝居を演じる』図書館ブックレット・あなたもできる実技

編①，2003年11月25日、図書流通センター発行
である。

今後もこれらの紙芝居啓蒙書も活用して、さらなる保育への紙芝居語り方を、授業も通して具体化していきたい。本稿では、その一端を纏めてみた。